

## 介護予防事業に参加した地区スタッフの 満足感とエンパワメント効果

祝原あゆみ・井上 千晶・山下 一也・齋藤 茂子  
伊藤 智子・松本玄智江・加藤 真紀・松岡 文子\*  
持田 和夫\*\*・福間 紀子\*\*・錦織 圭佑\*\*

### 概 要

S県A市とS県立大学が取り組む共同事業に参加した地区スタッフが事業から得ているものを分析し、今後の支援について検討することを目的に自記式質問紙調査を行った。その結果「プログラム内容の満足感」は高いが「教室運営の満足感」は低いことや、【高齢者への認識の変化】【自らが感じたプラスの効果】【介護予防への関心の高まり】【活動継続に対する意欲】の4カテゴリーの抽出から、個人のエンパワメント効果が明らかになった。1年間の事業は住民が介護予防に取り組むきっかけとしての役割を果たしており、今後も住民のパートナーとしての継続した関わりが必要と考えられた。

キーワード：介護予防, 住民, スタッフ, 満足感, エンパワメント

### I. 緒 言

わが国の高齢化率（2008年10月1日現在）は22.1%で、平均寿命は男性79.29歳、女性86.05歳と伸び続けている。島根県の高齢化率は28.6%で、全国で最も高齢化が進んでいる県である（厚生労働省，2009）。後期高齢者人口の割合も全国的に増加している現在、わが国の介護予防施策において取り組むべき最重要課題のひとつは後期高齢者人口の増大に伴う認知症予防である（横山，2010）と言われている。高齢化とともに増大する介護費用などの問題は深刻であり、なるべく介護を受けなくても済むよう、介護予防の取り組みが注目されている。2005年の介護保険法改正によって「予防重視型システムへの転換」が図られ、運動機能、栄養、口腔機能、うつ、閉じこもり、認知症について予防の重点が置かれるようになった。要介護認定では要介護・要支援状態に非該当であった高齢者にも、市町村が実施する地域支援事業により介護

予防のサービスが提供されるようになり、地域の特性に合わせた介護予防事業が実施されつつある。専門職による介護予防教室の他、地域で行われる高齢者サロンなどではボランティアが活躍する場面も多くなっている。

S県立大学では、2007年度よりS県A市との共同事業として回想法を中心とした介護予防教室（以下、共同事業とする）を実施している。この共同事業の実施目的には、地元における支援スタッフの育成と相互支援体制づくりが含まれている。介護予防に取り組む地区組織やボランティアグループの活発な活動により、高齢者にとって身近で効果的な介護予防活動が期待できる。

2008年度と2009年度の共同事業に参加した地区スタッフへのアンケート調査結果から、地区スタッフが1年間の事業を通して得ているものを分析し、介護予防活動を支えるスタッフへの支援について検討したので報告する。

### II. 目 的

共同事業の年度終了時に行ったスタッフアン

\*医療法人社団清風会五日市記念病院

\*\*出雲市役所高齢者福祉課

表1 共同事業の概要（2008～2009年度）

	2008 年度	2009 年度
参加者	29～31名（サロン事業参加者中心。途中増減あり）	13名（サロン事業参加者）
年間活動回数	全9回（調査・報告会含まず） 調査（2回；事前・事後）・回想法（6回）・ ミニ講話（3回）・報告会（1回）	全16回（調査・報告会含まず） 調査（2回；事前・事後）・回想法（8回）・ ミニ講話（8回）・報告会（1回）
年間の活動の 組み立て	毎月1～2回、金曜日に実施 月1回の回想法と2か月に1回のミニ講話が基本。 ※12月～1月は海苔摘みの繁忙期のため活動でき ず。	毎月第1・第3木曜日に実施 回想法とミニ講話を交互に実施。
活動の流れ	受付 メディカルチェック  導入 あいさつ・リアリティオリエンテーション・ まくれん体操 展開（回想法またはミニ講話） まとめ 茶話会・参加簿の記入・次回の案内 スタッフミーティング	受付 メディカルチェック お茶 導入 あいさつ・リアリティオリエンテーション・歌・ きよしのずんどこ節体操 展開（回想法またはミニ講話） まとめ 茶話会・参加簿の記入・次回の案内 スタッフミーティング
1回の活動時間	10：00～11：30	10：00～11：30
回想法研修会	対象者：共同事業に参加しているスタッフおよび参 加者 実施回数：2回 内容： 1回目 回想法の基礎—理論と実際— （参加者37名） 2回目 回想法の理論と実際—グループ回想法を中 心として—（参加者28名）	対象者：共同事業に参加しているスタッフおよび参 加者 実施回数：2回 内容： 1回目 回想法の理論と実際—グループ回想法を中 心として—（参加者36名） 2回目 からだとこころをうごかすレクリエーショ ンって（参加者33名）
地区スタッフ※	ボランティア（12）地区社会福祉協議会（2）民生 児童委員（1）コミュニティセンター職員	ボランティア（10）地区社会福祉協議会（4） 民生・児童委員（4）健康づくり推進員（2） 高齢者施設職員（1）コミュニティセンター職員
地区スタッフの 役割	ボランティア：受付・体操・お茶準備・回想法の観 察者 コミュニティセンター：地区スタッフ窓口・回想法 リーダー その他の地区スタッフ：回想法の観察者	ボランティア：受付・歌・お茶準備・回想法の観察 者 コミュニティセンター：地区スタッフ窓口・当日の 全体調整 その他の地区スタッフ：受付・回想法の観察者

※（ ）内は人数。

ケートの結果から、地区スタッフが活動を通し  
て得ているものを分析し、今後の支援方法を探  
ることを目的とする。

### Ⅲ. 共同事業の概要

S県A市は2005年に2市3町の市町村合併に  
より新市となった。旧市町をもとに5つで構成  
される地域は、海に面した地域から市街地の  
ある平野、さらには中山間地域を含み、人口

145,831人、高齢化率25.5%（2010年9月30日現  
在）である。

事業対象となる地区は毎年変わり、2008年度  
と2009年度はA市のB地域にある2地区にて実  
施した。2地区のうち一方は海苔の産地として  
知られる漁業の町、もう一方は柿を特産とする  
農山村地帯である。2地区とも地元のボラン  
ティアグループが中心となって運営している高  
齢者サロンを事業の基盤とした。

事業目的は、市と大学との共同により①地区

の高齢者を対象に地域のネットワークを活用した介護予防教室を試し評価を行うこと②認知症予防プログラムを軸に介護予防教室を試しながら地域のネットワークづくり、参加者のニーズの把握、スタッフの育成に重点を置いた活動を行うことである。

2008年度と2009年度に実施した介護予防教室の概要を表1に示す。

## IV. 研究方法

### 1. 用語の定義

#### 1) 地区スタッフ

地元ボランティアと地区関係機関を合わせたスタッフを指す。

#### 2) 地元ボランティア

事業対象地区で共同事業実施前から行なわれてきた高齢者サロンにおいてお世話役をしている、住民によるボランティアグループのメンバーを指す。

#### 3) 地区関係機関

A市職員、S県立大学関係者および地元ボランティアを除き、1年間の共同事業終了後、地元ボランティアと共に高齢者サロンを継続して支援していくことが想定される、住民を中心としたスタッフを指す。具体的には民生児童委員、健康づくり推進員、社会福祉協議会の職員や役員、地域包括支援センターやコミュニティセンターの職員、地域の福祉施設職員等を含む。

### 2. 調査方法

#### 1) 対象

2008年度および2009年度に共同事業に参加した地区スタッフのうち、それぞれ年度末に実施した事業報告会に参加した計32名を調査対象とした。

#### 2) 調査時期と調査用紙の回収方法

2009年3月および2010年3月にそれぞれの地区で行われた事業報告会実終了後、口頭で調査の概要を説明し、自記式質問紙を配布した。記入後の調査用紙はその場で回収した。

#### 3) 調査の内容

調査の内容は基本属性、教室に対する満足感、教室に関わった感想である。基本属性は、所属、

性別、年代について質問した。教室の満足感は、教室の回数、時間の長さ、スタッフの役割分担、教室の内容（受付、体操、ミニ講話、グループ回想法、茶話会）、振り返りについて、「満足」「まあまあ満足」「あまり満足でない」「満足でない」の4件法で質問した。教室に関わった感想は、「ご自身が変わったと思われること」「新たに気づかれたこと」「今後の地区の活動に対して」「全体を通して」の感想を自由記載で求めた。

### 3. 分析方法

質問紙の選択式回答部分の単純集計を行った。教室の満足感については、「満足」4点、「まあまあ満足」3点、「あまり満足でない」2点、「満足でない」1点とし、平均値と標準偏差を算出した。また、満足感について各項目の年度比較、項目群間の比較を行った。量的データの分析には統計ソフトPASW StatiSticS 18を使用した。

自由記載については意味を文脈単位で読み取ってコード化し、コードの意味内容の類似性に従って分類してサブカテゴリーとした。さらに内容の共通性が見られるサブカテゴリーを集めてカテゴリー化を行い命名した。分析の信頼性と妥当性を高めるために、複数の研究者で合意が得られるまで検討した。

### 4. 倫理的配慮

調査用紙は個人を特定できないよう無記名とし、調査時には調査の趣旨および協力は個人の自由であることを対象者へ口頭にて説明した。調査の回答をもって協力への同意を得たとみなした。

## V. 結果

### 1. 回収数と基本属性

対象となる2地区の地区スタッフで各年度の事業報告会に参加した32名（2008年度14名、2009年度18名）に調査票を配布し、2008年度は9名、2009年度は16名の計25名分を回収した（回収率78.1%）。25名すべてを分析対象とした。

対象者の属性を表2に示す。全体の傾向としては、対象者の年代は60歳代が最も多く72.0%と半数以上であった。性別では男性16.0%、女

表2 基本属性

属性		全体	2008年度	n (%)	
				2009年度	
年代	40代	1 (4.0)	1 (11.1)	0	(0.0)
	50代	1 (4.0)	1 (11.1)	0	(0.0)
	60代	18 (72.0)	7 (77.7)	11	(68.8)
	70代	4 (16.0)	0 (0.0)	4	(25.0)
	無回答	1 (4.0)	0 (0.0)	1	(6.2)
合計		25 (100.0)	9 (100.0)	16	(100.0)
性別	男性	4 (16.0)	1 (11.1)	3	(18.8)
	女性	19 (76.0)	8 (88.9)	11	(68.8)
	無回答	2 (8.0)	0 (0.0)	2	(12.5)
	合計	25 (100.0)	9 (100.0)	16	(100.0)
所属	地元ボランティア	11 (44.0)	6 (66.7)	5	(31.3)
	地区の関係機関	12 (48.0)	2 (22.2)	10	(62.5)
	無回答	2 (8.0)	1 (11.1)	1	(6.3)
	合計	25 (100.0)	9 (100.0)	16	(100.0)

表3 地区スタッフの教室に対する満足感

	教室の回数	時間の長さ	スタッフの役割分担	受付	体操	ミニ講話	グループ回想法	茶話会	ふり返り	n(%)
満足	18 (72.0)	14 (56.0)	13 (52.0)	16 (64.0)	18 (72.0)	18 (72.0)	18 (72.0)	14 (56.0)	14 (56.0)	
まあまあ満足	7 (28.0)	7 (28.0)	10 (40.0)	6 (24.0)	5 (20.0)	3 (12.0)	6 (24.0)	8 (32.0)	10 (40.0)	
あまり満足でない	0 (0.0)	1 (4.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (4.0)	0 (0.0)	
満足でない	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	
無回答	0 (0.0)	3 (12.0)	2 (8.0)	3 (12.0)	2 (8.0)	4 (16.0)	1 (4.0)	2 (8.0)	1 (4.0)	

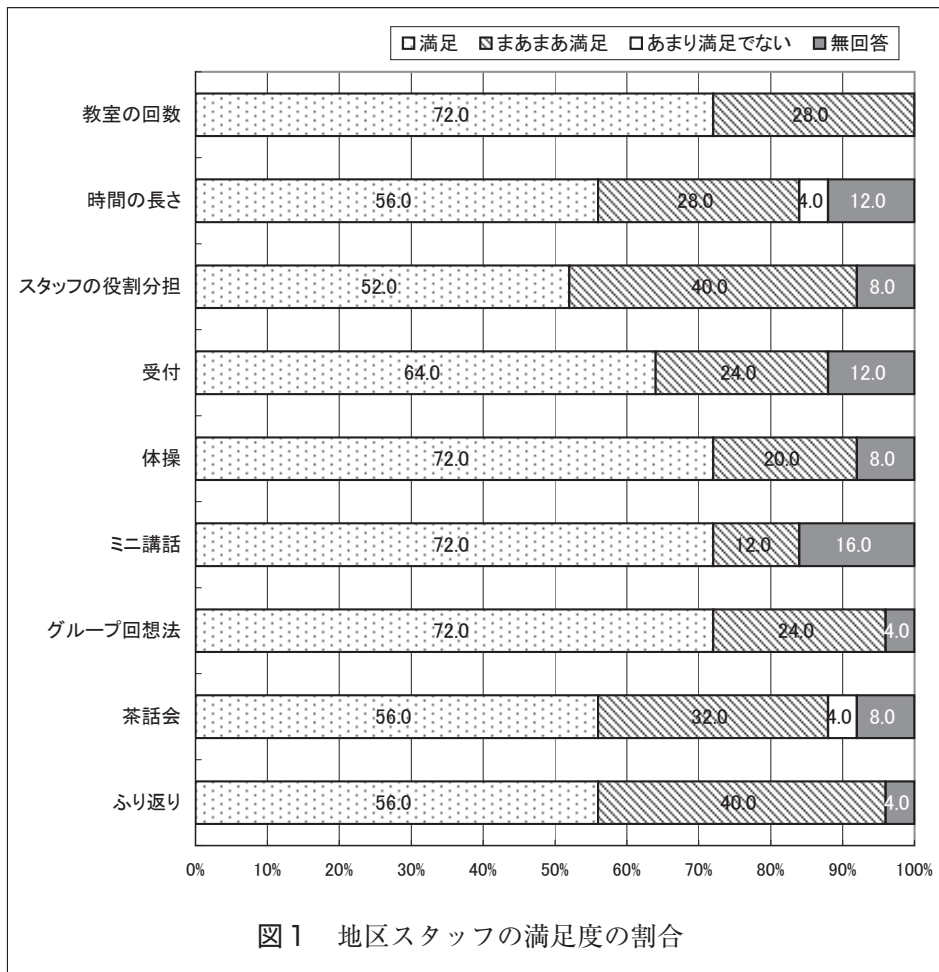




表4 満足感の年度比較（質問項目別）

	2008年度		2009年度		有意差※
	平均値	n	平均値	n	
教室の回数	3.75	4	3.91	11	0.439 (n. s.)
時間の長さ	3.50	4	3.82	11	0.640 (n. s.)
スタッフの役割分担	3.50	4	3.73	11	0.425 (n. s.)
受付	3.75	4	3.82	11	0.778 (n. s.)
体操	3.75	4	3.82	11	0.778 (n. s.)
ミニ講話	3.75	4	3.91	11	0.439 (n. s.)
グループ回想法	3.50	4	4.00	11	0.015 **
茶話会	3.50	4	3.73	11	0.425 (n. s.)
ふり返り	3.50	4	3.64	11	0.645 (n. s.)
合計	32.50	4	34.36	11	0.223 (n. s.)

※Mann-WhitneyのU検定

対象者25名のうち質問9項目中に欠損値があるデータは除外。

表5 満足感の平均値（項目別）

	得点範囲	最小値	最大値	15	
				平均値	標準偏差
教室の回数	1～4	3	4	3.87	0.352
時間の長さ	1～4	2	4	3.73	0.594
スタッフの役割分担	1～4	3	4	3.67	0.488
受付	1～4	3	4	3.80	0.414
体操	1～4	3	4	3.80	0.414
ミニ講話	1～4	3	4	3.87	0.352
グループ回想法	1～4	3	4	3.87	0.352
茶話会	1～4	3	4	3.67	0.488
ふり返り	1～4	3	4	3.60	0.507

性76.0%で女性が多かった。所属別では地区関係機関48.0%，地元ボランティア44.0%で，割合はほぼ同じであった。男性の所属はすべて地区関係機関であり，女性の所属は地元ボランティアまたは地区関係機関であった。

年度別に見ると，2008年度は40代～60代女性および地元ボランティアが多く，2009年度は60代～70代女性および地区関係機関スタッフが多くなっていた。

## 2. 教室の内容に対する満足感

教室の内容に対する満足感の項目ごとの割合について，表3と図1に示す。「満足でない」と回答したスタッフはなく，「あまり満足でない」も時間の長さや茶話会で4.0%とわずかであった。「まあまあ満足」「満足」を合わせるとどの項目においても8割以上を占め，スタッフは教室の内容についておおむね満足しているという結果になった。

分析対象者25名のうち，質問9項目中に欠損値があるデータを除外した上で各項目の平均値を年度間で比較した（表4）。グループ回想法のみに有意差が見られたが，今回は2008年度と

2009年度のデータを合わせて分析することにした。

各項目の満足感の平均値を表5に示す。得点範囲1～4点のうち，平均値はどの項目も3.5以上であった。平均値が高い項目は，大学スタッフを中心とした講師が様々な介護予防の内容について講話をする「ミニ講話」（3.86），ストレッチや筋力アップなどの介護予防効果を目的とする「体操」（3.78），参加者が5～10名程度のグループに分かれて行う「グループ回想法」（3.75）であった。満足感の平均値が低い項目は「茶話会」（3.57），「スタッフの役割分担」（3.57），「振り返り」（3.58）であった。

地区スタッフの教室への関わり方について満足感の傾向を分析するため，9つの質問項目を「教室実施方法の満足感」「教室運営の満足感」「プログラム内容の満足感」の3群に分け，比較した（表6）。教室の回数・時間の長さを「教室実施方法の満足感」，スタッフの役割分担・受付・茶話会・振り返りを「教室運営の満足感」，体操・ミニ講話・グループ回想法を「プログラム内容の満足感」とした。3群の合計得点には有意差があり，「プログラム内容の満足感」が

表6 満足感（項目グループ別）

	項目数①	得点範囲	最小値	最大値	平均値②	②/①	中央値	有意差※	標準偏差
教室実施方法の満足感	2	4~8	5	8	7.60	3.80	8.00		0.910
プログラム内容の満足感	3	3~12	9	12	11.53	3.84	12.00	0.000 ***	0.834
教室運営の満足感	4	4~16	12	16	14.73	3.68	15.00		1.438
満足感合計	9	9~36	29	36	33.87	3.76	34.00	—	2.232

教室実施方法の満足感 : 教室の回数・時間の長さ  
プログラム内容の満足感 : 体操・ミニ講話・グループ回想法  
教室運営の満足感 : スタッフの役割分担・受付・茶話会・ふり回り

※Friedman 検定

高く、「教室運営の満足感」が低くなっていた。

### 3. 地区スタッフが事業を通して得ているもの

地区スタッフが教室に関わった感想を、地区スタッフが教室から何を得ているのかという視点で分析した(表7)。以下、カテゴリーを【 】, サブカテゴリーを< >, コードを[ ]で示す。

分析の結果、【高齢者への認識の変化】【自らが感じたプラスの効果】【介護予防への関心の高まり】【活動継続に対する意欲】の4つのカテゴリーを抽出した。

#### 1) 高齢者への認識の変化

このカテゴリーは<高齢者への想いの変化><高齢者への対応の変化>という2つのサブカテゴリーで構成された。

地区スタッフは〔参加者の元気に気づいた〕〔人は変われると思った〕など自らが持つ高齢者のイメージが変化し、〔高齢者への思いが深まった〕〔高齢者への対応が変わってきた〕という考え方や態度の変化を自覚していた。

#### 2) 自らが感じたプラスの効果

このカテゴリーは<自分自身が人とのふれあいの場を得た><勉強になった><自分自身が楽しむことができた>の3つのサブカテゴリーから構成された。

地区スタッフは教室で〔いろいろな人に会えた〕ことで〔人とのふれあい〕ができ、教室の内容から自分自身も〔勉強になった〕と感じ、〔楽しく活動できた〕〔元気になった〕〔よかった〕という感想を持っていた。スタッフという立場ではあるが、参加者とともに勉強しながら楽しんでいった。

#### 3) 介護予防への関心の高まり

このカテゴリーは<高齢者だという自覚><回想法効果の実感><高齢者の社会参加の必要性の理解><自分自身の介護予防についての関

心の高まり>の4つのサブカテゴリーで構成された。

地区スタッフは〔(加齢を)自分のこととして捉えた〕ことで自分も高齢者の仲間であると自覚し、〔自分自身も回想できた〕ことにより〔回想法の効果を感じた〕という感想を持ち、その効果を実感していた。また、教室に参加している高齢者を見て〔社会参加の必要性を感じた〕こと、スタッフ自らが〔外出への意欲が出てきた〕という実感を持ったことにより〔もっと(活動に)参加してほしい〕と感じ、参加者と自らの体験の両方から高齢者にとっての社会参加の必要性を理解していた。さらに、〔自分自身の生活スタイルや生き方を考えた〕ことにより〔介護予防の必要性を自覚した〕り〔未来の見通しがもてるようになった〕りし、介護予防への関心が高まっていた。

#### 4) 活動継続に対する意欲

このカテゴリーは<サロンのスタッフを継続したい><サロン活動の継続を望む><サロン活動の方向性に関する意見><地域の活動に広げたい>の4つのサブカテゴリーで構成された。

地区スタッフは1年間の活動を通じて〔これからも頑張りたい〕〔サロンのお手伝いを続けたい〕との思いを強くし、〔今後も長く続けてほしい〕〔会の発展を祈る〕など活動の継続を望んでいた。また、これから地区でサロン活動を取り組むにあたり、〔回想法を取り入れたい〕という思いを持ったり、〔今後のサロン活動に必要なこと〕を自ら考えたりして、今後の方向性に対する意見を持つようになっていた。そして自分達だけではなく〔地域の活動に広げたい〕という思いを持ち、学び手から伝え手になろうとする意欲も見られた。

表7 地区スタッフが活動を通して得ているもの

カテゴリー	サブカテゴリー	2008年度コード	2009年度コード
高齢者への認識の変化	高齢者への想いの変化	参加者の元気に気づいた(3)	高齢者への想いが深まった(1) 人は変われると思った(1)
	高齢者への対応の変化	高齢者への対応が変わってきた(3)	
自らが感じたプラスの効果	自分自身が人とのふれあいの場を得た	人とのふれあいができた(1)	いろいろな人に会えた(2) 皆が協力的だった(1)
	勉強になった	勉強になった(2)	勉強になった(2)
	自分自身が楽しむことができた	楽しい時を過ごした(1)	自分自身が元気になった(3) よかった(3) 感動的体験(1) 役割を持ち、楽しく活動できた(1)
介護予防への関心の高まり	高齢者だという自覚		(加齢を)自分のこととして捉えた(1)
	回想法効果の実感	回想法のよさを感じた(1)	回想法の効果を感じた(2) 自分自身も回想できた(2)
	高齢者の社会参加の必要性の理解	もっと参加してほしい(4)	社会参加の必要性を感じた(3) 外出への意欲が出てきた(2)
	自分自身の介護予防についての関心の高まり	介護予防の必要性を自覚した(4)	健康の大切さを感じた(1) 未来への見通しが持てるようになった(2) 自分自身の生活スタイルや生き方を考えた(1)
活動継続に対する意欲	サロンのスタッフを継続したい	サロンのお手伝いを続けたい(3)	これからも頑張りたい(3)
	サロン活動の継続を望む	サロンを今後も長く続けてほしい(3)	活動の継続を望む(3) 会の発展を祈る(3) 支援を継続してほしい(1)
	サロン活動の方向性に関する意見	今後のサロン活動に必要なこと(2) 回想法を取り入れたい(2)	今後も回想法に取り組みたい(2) 回想法テーマ設定の課題(1)
	地域の活動に広げたい	地域の活動に広げたい(1)	地域の活動に広げたい(4)

( )は人数

## VI. 考 察

### 1. 地区スタッフが感じる満足感

#### 1) 介護予防の学びに対する満足感

地区スタッフが高い満足感を示したのは、認知症予防以外にも運動や栄養、心の健康、尿もれ予防、口腔内の健康など介護予防のテーマを幅広く取り上げたミニ講話であった。年間を通じて実施した介護予防体操や教室のメインであった回想法の満足感も高くなっており、スタッフとして事業を支えた満足感というよりは、教室の一参加者として介護予防について学んだ満足感が高いと言える。教室に関わった感想の分析からも【高齢者への認識の変化】【自らが感じたプラスの効果】【介護予防への関心

の高まり】がカテゴリーとして抽出され、介護予防の学びに対する満足感を裏付ける結果となった。

全国ボランティア活動者実態調査(平成14年)によると、ボランティアの担い手の中心は60歳以上の女性であり、今回の調査もほぼ同じ傾向であった。この年代は仕事や子育てが一段落して時間の余裕ができ、地域の活動に取り組みやすい状況であるとともに、介護をしたりされたりすることを身近に感じている人々でもある。要介護状態を身近に感じるからこそ教室の内容に関心を持ち、効果を実感することによって高い満足感を得ることができたと考えられる。

#### 2) 教室への関わり方に対する満足感

教室運営の満足感は教室の内容や実施方法の満足感よりも低い結果となった。比較的満足感

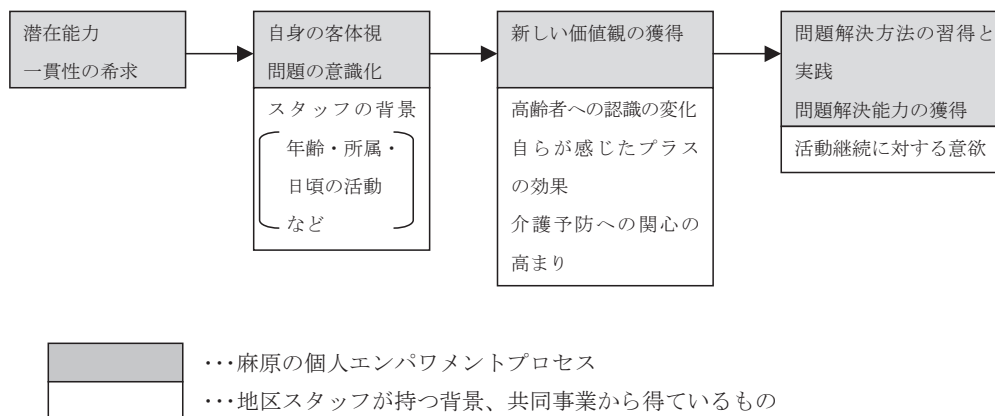


図2 共同事業における地区スタッフの個人エンパワメント・プロセス

が高かった受付は、教室実施時に地区スタッフの役割として任されていたものである。茶話会も地区スタッフを中心となって準備をしていたが、満足感は低かった。これはいつものサロン活動と同様の内容であること、茶話会の時間は大学スタッフがその日のまとめや次回の教室の案内をする時間も兼ねており、地区スタッフを中心となる内容とは言えなかったことなどが影響していると考えられる。

教室実施後に毎回行う振り返り会にも地区スタッフに参加してもらい意見を求めたが、満足感は他の項目に比べて低い結果となった。2008年度と2009年度では、実施した教室の回数に年間7回分の差がある。満足感の平均値の年度による有意差が見られたのはグループ回想法のみであったが、その他の項目も教室の実施回数が多い2009年度のほうが比較的高得点の傾向にあった。地区スタッフで事前に回想法についての知識を持つ者はほとんどいない状況であり、実施回数の差は回想法という手法や効果の理解とともに満足感に影響を与えたと思われる。また、定期的に教室を行うことによって、地区スタッフは自身の役割を理解し、市や大学のスタッフとも顔なじみになって、教室運営について自分たちの意見を表出できるようになっていくのではないかと考えられる。

教室に関わった感想の分析からは【活動継続に対する意欲】がカテゴリとして抽出された。感想の中には、「サロン活動を行うにはテーマ設定が必要」、「回想法を取り入れてみたい」など、これまで自分達で行ってきたサロン活動を評価して改善が必要な部分を考えたり、今後の

方向性を具体的に考えたりする記述もあり、事業運営について積極的に考える姿勢もうかがわれた。

## 2. 地区スタッフが事業を通して得ているもの

### 1) 地区スタッフのエンパワメント

エンパワメントは「個人が自己の生活をコントロール・決定する能力を開発するプロセス」(野嶋, 1996)とされる。麻原は個人のエンパワメント・プロセスを図に表し、個人のエンパワメントにおいては①個人の持つ潜在能力、一貫性の希求、②自身の客体視、問題の意識化、③新しい価値観の獲得、④問題解決の方法の習得と実践、問題解決能力の獲得のプロセスを他者との相互作用において行きつ戻りつしながら複雑に経過していくと述べている(麻原, 2000)。

今回地区スタッフの感想の分析から抽出された【高齢者への認識の変化】【自らが感じたプラスの効果】【介護予防への関心の高まり】【活動継続に対する意欲】の4つのカテゴリーは、地区スタッフ個人のエンパワメント・プロセスに相当すると考えられた(図2)。

地区スタッフの背景は、ボランティアグループや地区の役員、さらにはコミュニティセンターや社会福祉協議会といった、地域に根差した活動を行う施設の職員など様々である。しかし、年齢的に要介護状態を身近に感じたり、高齢者に接する機会の多さなどから人生の先行きに漠然とした不安を感じたりしているのは共通のようであった。自らの老化や介護予防について「このままでいいのだろうか」という自身の



客体視や問題の意識化は、漠然としたものではあっても教室開始前から地区スタッフの中に存在していたと思われる。地区スタッフは教室に関わって回想法やミニ講話、また参加している高齢者との関わりなどを通して次々と新しい発見をし、新たな価値観を獲得していった。問題を様々な方向から捉えられる知識と経験を得て、漠然とした問題意識がはっきりとしたものに変化し、介護予防の意義と必要性を理解し、今後の活動継続に対する意欲をもつまでにエンパワーされたと考えられる。

## 2) 1年間の事業で得られる効果

地域で活動するボランティアが活動を通して得ているものを分析した結果はこれまでも報告されている。

北山らは、ボランティアが活動に参加することには仲間や対象者との関わりによって自分自身を見つめて幸福感を感じたり、価値観を再構築する意味があるとし(北山ら, 2004), 保田らはボランティアが活動を通して得ているものは「交流の広がり, 深まりによって得ているもの」と「主体的参加によって得ているもの」があると報告している(保田ら, 2004)。今回のアンケート調査結果からは主に北山らの「自身の価値観の再構築」や保田らの「交流の広がり, 深まりによって得ているもの」の部分抽出されたと言える。1年間の教室を通して, 共同事業の目的にあるスタッフ育成や相互支援体制づくりのうち, 地域で介護予防活動に取り組むスタッフの土壌をつくることができた。本事業は住民が介護予防に取り組むきっかけとしての役割を果たしていると考えられる。

一方で, スタッフ間の仲間意識や主体的な活動に関する意識は少なく, 今後も活動を続けたいという意欲はあっても, 具体的な活動方法などについて自主的に考えようとする地区スタッフはまだ少ないと考えられる。

今後, 個人のものにとどまっていたエンパワメントがグループやコミュニティへ拡大していくための支援を行うことが必要である。具体的には, 地区スタッフに事業運営にも関心を持ってもらうなどの課題に対する働きかけが必要と考える。エンパワメントへの関わりでは住民と同じ目標に向かって協働することが最も大切で

あるとされる(麻原, 2000)。また, 自主的な活動展開を目標とするグループ支援には, 継続的にグループに関わり, 関わりが少ないことを理想としながらもグループだけで進行や運営ができない時は積極的な支援をするという柔軟性を持つパートナーシップモデルが適していると言われている(蔭山, 2003)。地区スタッフの中に既にある, 「活動を継続したい」「地域の活動に広げたい」という思いを活かし, 地区スタッフが互いに仲間意識を持ちながらともに地域の介護予防を進めていこうとする意識を高め実践していけるよう, 地域の良きパートナーとして, 地区スタッフとの関わりを継続していくことが必要であると考えられる。

## VII. 本研究の限界

満足感について今回解析したデータは欠損値のない15名分であり, 対象者32名の半数にも満たないため, 対象とした地区スタッフ全体の結果とするには限界がある。また, 報告会欠席者の満足感や感想は把握できていない。多くの地区スタッフの意見を反映できるよう, 調査方法を見直し, 今後さらに詳細な検討を加える必要がある。

## VIII. 結 語

S県A市とS県立大学が共同事業として取り組む介護予防教室に参加した地区スタッフが事業を通して得ているものや満足感からを調査した結果から, 以下のことが明らかになった。

1. 地区スタッフの満足感は「プログラム内容の満足感」が高く「教室運営の満足感」は低かった。
2. 教室に関わった感想からは【高齢者への認識の変化】【自らが感じたプラスの効果】【介護予防への関心の高まり】【活動継続に対する意欲】の4つのカテゴリーが抽出された。
3. スタッフの満足感「介護予防の学びに対する満足感」が中心であり, 個人のエンパワメント効果が見られた。
4. 1年間の介護予防教室は地域の住民が介護予防に取り組むきっかけとしての役割を果た

しており、今後も住民のパートナーとして関わりを継続していくことが必要と考えられた。

進め方・まとめ方, 174-181, 医歯薬出版.

## 謝 辞

ともに共同事業に取り組み、調査にご協力くださいました住民の皆様と関係機関の皆様にご心より感謝申し上げます。

## <引用文献>

- 麻原きよみ (2000) : エンパワメントと保健活動—エンパワメント概念を用いて保健婦活動を読み解く—, 保健婦雑誌56 (13), 1120-1126.
- 麻原きよみ (2000) : 高齢者のエンパワーメント—文化的見地からのアプローチ—, 老年看護学5 (1), 20-25.
- 出雲市 (2010) : 出雲市の年齢別人口 (平成22年9月30日現在), 2010-11-4, <http://www.city.izumo.shimane.jp/www/contents/1184806835555/files/EX.xls>
- 蔭山正子 (2003) : グループの自主化のための理論・技術, 看護研究36 (7), 39-48.
- 北山明子, 大西章恵 (2004) : 保健師のボランティアに対する支援の一考察—ボランティアの主観的世界に目を向けて—, 保健師ジャーナル60 (12), 1204-1209.
- 厚生統計協会 (2009) : 国民衛生の動向・厚生 の指標増刊56 (9), 39-43.
- 厚生労働省社会・援護局地域福祉課 (2007) : ボランティアについて, 2010-11-4, [http://www.mhlw.go.jp/shingi/2007/12/dl/s1203-5e\\_0001.pdf](http://www.mhlw.go.jp/shingi/2007/12/dl/s1203-5e_0001.pdf)
- 野嶋佐由美 (1996) : エンパワメントに関する研究の動向と課題, 看護研究29 (6), 453-464.
- 保田玲子, 工藤禎子, 桑原ゆみ, 三国久美, 森田智子, 深山智代 (2004) : 住民主体型閉じこもり予防事業のボランティアが活動を通じて得ているもの, 保健師ジャーナル60 (4), 376-383.
- 横山美江 (2010) : よく分かる地域看護研究の

# Satisfaction and Effect of Empowerment of District Staff Who Participated in Preventive Service to Long-Term Care

Ayumi IWAIBARA, Chiaki INOUE, Kazuya YAMASHITA, Shigeko SAITO,  
Tomoko ITO, Ichie MATSUMOTO, Maki KATO, Kenji HAYASHI,  
Ayako MATSUOKA \*, Kazuo MOCHIDA \*\*, Noriko FUKUMA \*\* and Keisuke NISIKOORI \*\*

**Key Words and Phrases** : preventive approach in long-term care, resident, district staff, satisfaction, empowerment

---

\* Itsukaiti Commemoration Hospital

\*\* Senior Citizen Welfare Section, Izumo City Office